



学校法人大手前学園理事長
福井 有

大手前大学の新「教育力」改革

Ⅰ 大学のブランド構築とカリキュラム改革

1. 有識者によるブランド構築会議

本学では、2007年1月から半年間の日程で、学内外の有識者を集めて「大手前はこれからどういう大学を目指すのか」というブランドビジョンについての議論・検討を実施しました。

大学という非営利組織のブランド構築という一見難解な作業は、座長の関西学院大学・和田充夫教授の方針により、徹底的なマーケットイン、つまり顧客や社会のニーズに真摯に耳を傾けることを重視。当年度入学生及びその保護者、新高校3年生、高校の進路指導担当者、企業の採用担当者を対象に多岐にわたる調査を実施し、本学のニュービジョンのコンセプトに反映させていきました。

その調査結果は「New Vision Vol.2」の報告にあった通りですが、本学の

ニュービジョンは「『社会人基礎力』と『自分で創る専門性』を育むリベラル
アーツ・カレッジ」という結論に至りました。これは、幅広い教育を自発的な
学びの環境と共に提供することで「コミュニケーション」「チャレンジ」「主
体性」「協調性」といった社会が求める能力を高めていくという、本学のブラ
ンド提供評価を凝縮したものです。

2. 教学運営評議会の設置

2007年にスタートした「3学部クロスオーバー」「ユニット自由選択制[®]」
の実現に向けて、前もって準備した組織改革があります。それが3つの学部
の学部長、各部局部長、事務局長等で構成される、教学運営準備委員会です。
半年の準備期間を経て、2007年4月には従来の縦割り意識の学部教授会を
中心とした大学運営から、教学運営評議会が設置され、同評議会が最高意思
決定機関とする大学運営へと体質改善を図りました。

構想から入れると2年間の準備期間を要しましたが、何度となく全学的
に開催したFD、教授会、宿泊研修等を通して、教授全員の理解と協力を得
られたことが、大学改革を推し進められた鍵だと考えています。

(1) 教学運営評議会

教学運営評議会の主な任務は、以下の通りです。

大学の重要な制度及び規則の制定、改廃

大学の重要な施設の設置配置

大学及び教員の人事

学部及び研究科の教育課程

大学の将来計画

大学評価及び自己点検評価

各学部その他の連絡調整

その他大学全般の運営

(2) 教授会

教授会の主な任務は、以下の通りです。

教授及び研究

学生の入学、休学、退学及び賞罰等

成績評価及び卒業

学生の更生補導

なお、最近は教学運営評議会が月1回定例的に行われています。その決定事項は月1回行われる3学部合同の教授会で発表されており、学部ごとの従来の教授会の開催数は以前より減ったと聞いています。

3. ユニット自由選択制[®]へ

(1) リベラルアーツ型教育

本学の新しい大学の型のモデルとして、「リベラルアーツ大学を目指す」という方向性がブランド構築会議で確認されたと先に触れました。この流れが誕生したきっかけの一つに、絹川正吉元国際基督教大学学長によるFD講演があります。同氏を本学にお迎えし講演を頂き、「ユニバーサル化した大学に対してすべての学生に意味のある教育が求められている」「バラバラな学生に対して意味のある教育をするのがリベラルアーツ教育」と教えられたのです。

氏によると、リベラルアーツ・カレッジの一つの典型モデルとして、ハバフォードカレッジという小規模な大学がフィラデルフィアの郊外にあり、その大学の目標は、「学習能力の涵養と健全で思慮深い判断力の育成、学位取得のための諸条件は、これらの能力の訓練を人知(Human Knowledge)

の広範な領域及びその一つの分野での深い学習において行わせるために定められている。」とあるそうです。

このような小規模のリベラルアーツ・カレッジは全米で500余りあり、いわゆるアイビーリーグなどに代表される研究型総合大学と区別されています。そのリベラルアーツ教育の特性は、次のように表現されます。

- 学生の自己教育(主体的学習)を基本にする
- 早期に専門を固定させない(Late Specialization)
- 専門教育を教養として学ぶ
- 一般教育を行い、教育に社会性を持たせる
- 批判的な思考力・課題発見・解決能力の育成
- キャンパスライフ等の潜在化した学習課程を重視

リベラルアーツ教育の中核は、学術基礎教育であり、そこには専門教育もありません。このような教えの中で、本学の目指すべき大学の型がリベラルアーツ型教育と定まったのです。

(2) ユニットと10の系のシステム

リベラルアーツ大学の基本理念に沿うべく、3つの学部は限りなく壁を低くしてあり、卒業要件は必修科目20単位、学部選択必修24単位、残り80単位は自由選択としました。学部は言うならば学びの大分類という位置づけです。学びの中分類は硬直的な「学科」ではなく、柔らかな「系」により行い、10系(後に14系となる)を配置しています。

主専攻(メジャー)は20設定されており、もちろんダブルメジャーが可能です。主専攻は40単位以上の専門学習と400番台の学習到達をもって与えられ、副専攻(マイナー)は20単位以上の専門学習と300番台の学習到達をもって与えられます。主専攻、副専攻は、自己学習する際の最も基本的な導

きとなるものです。

リベラルアーツ大学は、学部、学科、コースといったもので学生の囲い込みが不可能な基本構造となっており、また早期に専門を固定することも極度に嫌う、いわゆる“Late Specialization”が根本精神にあります。本学ではこれらの系、主専攻、履修モデル等を、時代や学生のニーズに合わせて柔軟にスクラップ&ビルドすることを基本精神に据えました。これは教員にとっては非常に緊張感を伴うシステムであり、学生本位の教育を怠れば自分たちの居場所がなくなることを意味しているのです。

(3)コース・ナンバー制の導入

米国大学の教学システムの中で、我が国において重要視されていたことの一つに各科目につけられている番号(コース・ナンバー)の役割があります。コースというのは、米国の大学では科目のことで、およそすべての大学において一つ一つの科目に振ってある科目番号のことを言います。

このシステムにより学生が学部、学科を超えた履修をする場合、さらには大学をまたがって併修、さらには編入(トランスファー)する場合に、既に履修した科目を既修得済として決定する場合の基準となっています。

このコース・ナンバーは、学部は100番から400番、大学院は500番から上となっており、我が国で言うところの何年次配当であるかということの意味しています。

このコース・ナンバーの目的は、レベルを表すことによって各科目の位置づけを表すだけでなく、その学科内で提供している各専攻(メジャー)や副専攻(マイナー)のカリキュラムの編成にあたり、どのレベルから何単位くらい修得しなくてはならないかというルールを設定する意味を持ちます。

本学ではユニット自由選択制という、学生が学部を超えたカリキュラムを自由に作成、履修できることを可能にするため、このコース・ナンバーをすべての科目に振り分けることを決めました。

II 社会人基礎力の涵養

1. 初年次教育

2007年度からまず新入生に対するプログラムを3学部共通で行う実験が始まり、初年次教育プログラムでは、コアカリキュラムとして必修4科目を設定し、すべての学部の新入生に担当しました。「情報活用」「英語表現」「日本語表現」「フレッシュマンセミナー」がそれにあたり、学生は科目全体を通じて初年次に必要なアカデミックスキルを習得し、また自己管理能力を身につけることを目標とします。

これら必修4科目は、基本的には少人数制を取っています（「英語表現」「日本語表現」「フレッシュマンセミナー」は1クラス約17名、計48クラス。「情報活用」は1クラス最大50名、計24クラス）。また、クラスによって学ぶ内容や評価基準に差が出ることを防ぐため、すべての学生に対して同一のカリキュラムを提供しています。

本学における初年次教育の特徴は、各科目が完全に独立してそれぞれの授業を展開するのではなく、科目間での密な連携を構築しているところにあります。特に「情報活用」「英語表現」「日本語表現」の3科目は、同一のターム制を実施し、出欠や課題提出状況を同じシステムで管理するなど、共通したルールのもとでプログラムを運用しています。このシステムにより、学生は教科の内容を学習することはもちろん、共通のルールの遵守を通して大学生としての学習習慣や規律を身につけることができます。

また「フレッシュマンセミナー」は、ホームルーム的な役割を担っています。このカリキュラムでは、教科科目では実施することの難しいさまざまなプログラムを提供します。学生は地域連携することで、自身の状況を多様な角度から知り、支援することが可能になります。学習やボランティア活動などに取り組む一方、個別ケアや学習支援を受けることができます。さらに、

他のベーシック3科目の担当者と相互に連絡を取り合うことで、学生の情報を多方面から分析することができます。教科によって学生の興味の度合いや態度は変わります。1科目ではなく必修4科目すべてが連携することで、学生の状況を多様な角度から知り支援することが可能になるのです。

2009年度秋学期末に実施したアンケートによると、必修4科目全体のプログラムに対する満足度は、「とても満足している」と「まあまあ満足している」を合わせて86.1%となっています。また、「スタンプ制」や「到達目標別コース編成」の項目で高い数値を示し、学生がこのシステムに強い満足感を示していることがわかります。

さらに、このプログラムを支援する「確認くん[®]」(注 1)は、その「必要性・便利さ」について85%以上の支持を得ています。当システムが、大学の初年次教育にとって欠かすことのできないものであることがわかります。学習成果については、3科目(フレッシュマンセミナーを除く)が学期末に実施している検定等のテスト結果を挙げておきます。

情報活用では、「日本語ワープロ技能標準試験3級」を全員が受験しました。Aコースは100%、Bコースでは94.8%の学生が合格し、ほとんどの学生がコース目標を達成しました。Cコースにおいても56.8%の学生が合格しました。英語表現では、世界レベルの英語教育機関ELSのオンライン学習システムELS+eのe-Learningテストにおいて、春学期から秋学期にかけてテスト成績が10%上昇しました。日本語表現では、「話しことば検定」3級に88%の学生が合格、作文/小論文検定4～6級には各級合わせて98%が合格しました。

学習支援に関しては、チューター制度と自習室の開放による学習習慣の向上が見られます。2009年度の自習室利用者数は、延べ4,151人(前年比79%増)でした。

これらのデータから、2009年度の本学における初年次教育は、学生の満足度においても学習支援においても高い成果を上げていることがわかります。

2.メディアライブラリー CELL

以上述べてきたようなカリキュラムを中心とした大学改革ムーブメントの中で、学園は2006年に創立60周年を迎えました。その記念イベントの一つとして、さくら夙川キャンパスに新図書館の建築計画が並行して進められていました。

この新図書館のコンセプトを、ブランディング構築会議のメンバーも務めてもらった日建設計の山口義雄設計室主幹は、次のように述べています。



・「えらべる：プラットホーム」

場所・時間・ツール・コンテンツを自由に選ぶ

・「みえる：ショーケース」

外から中に集う人たちが透けて見える

・「つながる：キャンパスハブ」

水平展開で横に、そして世代を超えてつながっている

・「ひろく：リバーシブル」

内外の扉が交互に開くシステム

つまり、新図書館はいわばパソコンのオペレーティング・システムで、学

生や教職員が自由に場所、時間、ツール、コンテンツなどを選び利用することができるというコンセプト。また、社会的ストックとしての効用という意味では、建築・アート・景観などの社会文化としての価値を大いに残している」とコメントしています。

よって新図書館は、メディアライブラリー CELL (Communication & E-learning Library)と名づけられ、昨年秋に全国図書館協議会の建築賞に選出されるという栄誉に輝きました。その受賞理由は、「メディアライブラリー CELLは小集団教育という大学の教育方針を具現化した施設であり、大学図書館に求められる機能性と建築としての高い品質を兼ね備えている。」という過大な評価を頂きました。

3 .C-PLATS

(1)アルバーノカレッジの能力開発プログラム

アルバーノカレッジ(注 2)は、40年にわたり社会に求められる8つの能力を養う教育体系(Ability Based Curriculum)を実践し、その教育体系を通して、学生の学習成果(Learning Outcomes)を測定することにより、学生の成長を促し社会への優秀な人材の提供を可能にしてきました。

こうしたアルバーノカレッジの取り組みは、米国内のみならず、世界から注目を集めており、年間200組織・700名以上の視察団が同校を訪ねているほどの注目校ですが、今春、関西生産性本部の計らいで副学長一行が本学にお越しいただけました。

同校の能力教育の目標は、8つの能力に代表されています。それらは コミュニケーション 分析 問題解決 価値判断 対人能力 グローバルな視野 効果的な社会参加、そして 美的感受性です。

これらの能力を学生に身につけさせるさまざまな工夫と取り組みが、講演で紹介されました。

一例を挙げれば、8つの能力を4段階に分けて8×4、つまり32のマトリックスにすべての科目をプロットし、学生はそこに明示されている知識と能力の到達レベルを確認して、学習計画を立てています。

また、すべての教員は従来の学部に加えて、8つの能力の開発や評価に責任を持つ8種類の能力開発委員会(能力開発学部とも言う)のどれかに属しながら、学生1人1人の能力の変化を確認しています。

その変化の記録は、デジタル・ポートフォリオというシステムに記録されて、就職活動などの資料として学生自身が活用することも許されているのです。

この他、400人にも及び学外の社会人ボランティアによる学生の能力評価などが長年にわたりシステム的に行われており、学生はもとより教職員の活動が常に社会の厳しい眼から評価を受ける制度となっています。

(2) C-PLATSとOCD

このアルバーノカレッジの能力開発プログラムを参考にして、本学でも学生の能力を横断的に育成する基準を使ってはということになり、さまざまな議論の結果C-PLATSが誕生しました。

C-PLATSとはつまり、Creativity(創造力)、Presentation(プレゼンテーション力)、Logical Thinking(論理的思考)、Artistic Sense(芸術的センス)、Teamwork(チームワーク)の5つの能力にSelf-Control(自己管理能力)を加えた6つのことで、Self-Control(自己管理能力)以外の5つはそれぞれ基礎、応用、発展の3段階のレベルが示され、これをOCD(大手前コンピテンシーディクショナリー)と名づけました。このC-PLATSのそれぞれの能力を、すべての教員は自分の担当する科目において力点を置いて指導にあたってほしいと依頼し、さらには学生には評価シートに自己評価をさせています。

この評価はあくまでも他者評価ではなく、自己評価によりその達成度を測るところが特徴的な点です。つまり、教員と学生がお互いの相互作用によって学生の学びの成果と評価を中心に、知識・技能の獲得と同時に

コンピテンシーがどのように獲得されているかという複眼的な視点に加えられたのです

III 通信教育課程の設置

1. eラーニング主体の通信教育課程設置

本学は来るべき知識基盤社会への大学の果たすべき使命を実施するため、通信教育課程を文部科学省に申請し、2009年10月末、設置認可を受けました。現代社会学部に併設された同課程は、入学定員500名、3年次編入定員500名、総定員3,000名の規模となります。教育課程は、「教養の理解」「現代社会と企業の理解」「コミュニケーションの理解」「情報の理解」の4つの専修からなり、カリキュラムは出来るだけ学生の自由な選択が可能になるよう配属されています。民主党のマニフェストによれば、日本の高等教育の進学率44%は国際的に見て決して高いとは言えず（OECD平均48%）、特に25歳以上の社会人入学者の割合で見ると、OECD加盟各国の平均が20.6%に対し、日本は2.7%と大きな差が見られます。

この点、中央教育審議会の委員を務めた元慶應義塾の安西祐一郎塾長は、2025年までに社会人学生の在籍率を20%程度に上げるべきという提案をまとめています。

このような流れの中で、本学でも現代社会学部に社会人を主対象とした通信教育課程を今春開設しました。用意した科目は168科目で、そのうち7割をeラーニングのコンテンツとして配信できるシステムで行います。

2. DES（株式会社デジタル・エデュケーショナル・サポート）の設立

通信教育課程で配信するコンテンツを制作するため、大手前学園はその

実績を持つ株式会社デジタル・ナレッジと共同出資のDES（株式会社デジタル・エデュケーショナル・サポート）を立ち上げたのが2008年2月。つまり、授業コンテンツと配信に関するノウハウを外部へ出さないようにする戦略を取ったわけです。この会社設立直後より、早速既存学部の授業のデジタル化に取り掛かり、2008年に4科目、登録人数391名（延べ592名）、2009年には9科目1,034名（延べ2,292名）の学生がeラーニング授業を受講しました。

またその修了率は平均82.8%で、これは通学生のその修了率と遜色ない結果となりました。修了率だけでなく、試験の平均点の実態も比較してみると、どちらも変わらず学生はeラーニングを特別なものとして見ていないことが判明しました。

年 度	2008年度春	2008年度秋	2008年度通年	2009年度春	2009年度秋	2009年度通年
履修登録者数(延べ数)	183	409	592	884	1,408	2,292
実学生数	165	310	475	648	798	1,446

3. ブルーオーシャンへの道

通信教育課程のミッションは、「高等教育の受講を希望するすべての人に大学の学士課程を提供する。」というものです。

DES社の提供するサービスとしては、(1)高等教育機関専用のeラーニングシステム、(2)教材コンテンツの企画・開発と、(3)高等教育機関の教育サービスの総合支援であり、役員4名、社員21名の体制で業務を行っています。近い将来、本学のデジタルコンテンツ制作だけでなく、外部の大学、団体組織などからの受注も取っていきたいと考えています。

現在の日本の高等教育のおかれている状況を見ると、INSEADビジネススクールのチャン・キム教授の言うところのレッド・オーシャンで、血みどろの戦いを強いられていると表現せざるを得ません。同氏の発想にヒントを得て、今までの本業の延長上でコストを最小限にしてさらに無競争の市場に乗り出そうと考えたのが、eラーニングによる通信教育課程設置です。

来るべきインターネット時代の新しい教育の形を提案し、実行していく。それによって今までこちらを向いていなかった社会人や同窓生、地域住民の方々などに対し、さまざまな教育プログラムを提供していく。この方策がブルーオーシャン戦略です。

また通学制の学生にもそれらを開放し、通信制の学生たちが大手前のリアル、そしてバーチャルなキャンパスに学び、交流するという近未来の教育の姿を私は夢見ています。

初出 「私学経営」No.424(平成22年6月号)

「私学経営」No.425(平成22年7月号)

(注 1) 確認くん®

主にベーシック必修科目を包括的にサポートする本学独自のシステム。

携帯端末もしくはパソコンからアクセスすることで画面に学生の学習の進捗状況が表示される。

(注 2-1) アルバーノカレッジ

< 創 立 > 1887年 米国 ウィスコンシン州ミルウォーキー

< 学生数 > 2,654名(学部 2,314名、大学院 340名)

< 教員数 > 110名

< 学 部 > 教育学部、看護学部、ビジネス学部、教養学部

(注 2-2)

2010年6月16日～18日の3日間、アルバーノカレッジで行われたワークショップに、本学より森道子教授、奥田雅信准教授、新垣円助教の3名が参加、奥田准教授は本学の一連のカリキュラム改革の取り組みについて発表した。